

登場人物紹介

- 三島セト（18）：大学に通う男子学生。イリヤを実の妹のように大切にしている。先天的な任意ゲノム編集が一般化した第1世代だが、祖父のタケルの意向によって一切の編集を受けていない。
- 一ノ瀬イリヤ（10）：小学校に通う女子生徒。セトを実の兄のように慕っている。先天的な任意ゲノム編集が一般化した第2世代であり、将来はバイオプロダクトの生産・管理を担う職業「プロダクトブリーダー」を目指している。
- 三島タケル（80）：セトの祖父。現在は老人ホームに入居しており、時折セトとイリヤに見舞いに来てもらっている。もともとは先天性の重い遺伝子疾患を患っていたが、複数回のゲノム治療によって回復した。
- ルミナ：セトが所持しているパーソナルバイオプロダクト。ネズミのような姿で、セトの祖母の形見である携帯ゲーム機をベースにしている。通信や健康管理といった携帯デバイス全般の機能を備えており、皆からペットのように親しまれている。

-

未来の願望を「夢」と呼ぶようになったのは、英語の“Dream”が入ってきた後のことだという——三島セトは教室の片隅から子どもたちの背中を眺めつつ、そんなことを思い出す。

教室の中心に「将来の夢」の文字が踊り、その周囲を子どもたちの文章や動画が取り囲んでいく。アイディアの渦の中には、ゲノム・トレーダー、アーバン・コンダクターなど人気どころの職業が並んでいる。

「みなさんたくさんの夢を出せましたね。ひと月後の七夕祭にむけて少しずつ具体的にしていきましょう。自分は どうしてそれになりたいのか。きょう授業を観に来てくださったカインドの方々とも話し合ってみてください」。

教師はそう言って授業を切り上げる。一ノ瀬イリヤはセトの元に一目散に駆けてくる。2人は一緒に教室を出て、コミュニケーションの市街部へと歩いていく。

人口減少が進んだ現在、一部の地域では、人々の暮らしの基盤は国や都道府県からコミュニケーションと呼ばれる中規模共同体に移りつつある。住民によって運用されるコミュニケーションでは、血縁以上に親密な互助関係が生じることも珍しくない。かつての家族のかたちは緩やかにほどけ、拡張された人々の結びつきは「カインド」と呼ばれている。セトとイリヤも血のつながりはないが、実の兄妹以上に互いの時間を共有していた。

「そういえばイリヤの夢はなんだったんだ」

セトの問いにイリヤは照れたような笑みを浮かべる。

将来の夢を語ることは今や特別な意味を持つ。イリヤたちにとって「何になりたいか」は、「どの遺伝子を発現させるか」の判断に直結しているからだ。

かつて重篤な疾患にのみ認可されていたヒトへの遺伝子編集は、徐々にその精度と自由度を上げていった。今や治療を目的としない任意編集も認められつつあり、大学生のセトが第1世代、小学生のイリヤが第2世代にあたる。

特にイリヤたち第2世代は「ライブラリ」を細胞内に導入している。ライブラリは多様な能力に関係する遺伝子を集めた細胞内小器官であり、後天的な刺激によって特定の遺伝子のみを選択的に発現できる。つまり、イリヤたちは「自分のなりたいもの」に向かって自らを調整する機会が与えられている、と言ってもいいだろう。通常、義務教育の期間中に進路選択などと並行して発現の方向性を決定するのが一般的だ。これによって遺伝子編集は「親からの押し付け」ではなく「自己決定権の拡張」だとみなされるようになった。もちろん、遺伝以外の後天的な要素は大きい上に、心身の発達が著しい若年期に発現を行わなければ顕著な効果は望めない。だからこそイリヤたちは「自分が何になりたいのか」を真剣に考える必要があった。自分の身体と時間をどのように使うのか。それはこの時代において当たり前の権利であり、責任とさえ思われるようになっていった。

「これ、だよ」

イリヤはセトに、「プロダクトブリーダー」と書かれた画用紙を見せる。

プロダクトブリーダーはバイオプロダクトたちを育てる職能だ。動植微生物への遺伝子編集が一般化した現在、さまざまな機能を付加された細胞によるバイオプロダクトが市場へと広がっている。例えば、イリヤの頭上をうろついているルミナもそうだ。

ルミナはアーティフィシャル・コンパニオン、通称アーコンと呼ばれる代表的なパーソナルバイオプロダクトで、かつてのスマートフォンとペットを合わせたような存在だ。

ルミナがセトの胸ポケットへと潜り、ブルブルと身体を震わせる。セトの祖父、三島タケルからの連絡だった。ルミナはネズミをベースとしたアーコンで、今はセトの祖母の形見である携帯ゲーム機と接合している。丸みを帯びたプラスチックと毛皮、ひょろりと伸びた尻尾がセトの掌の中でモゾモゾと蠢く。

「イリヤ、じいちゃんとか、一緒に来るか？」

セトがそう言うと同時に、ルミナは駆け出し始める。セトはそれを追って視線を動かす。目の前の道路が、遠方の建築へとなめらかにつながるのが見えた。かつてのコンクリートビルの廃墟を包み込むように張り巡らされた網目状の建築群が、コミュニンの基本構造だ。昆虫の繭やサンゴの骨格を思わせる多孔質の部材が、道路や屋根、壁面をかたちづくっている。これらも全て、ゲノム編集を加えられた動植物によるものだ。高速で成長する木材がコミュニンの各施設を構成し、インフラ部分は自己修復や免疫機能を持つ「生きた」樹木がベースとなっている。

ふと空から、マイナーの羽音が聞こえてくる。マイナーは昆虫をベースとしたバイオプロダクトで、建築の生体部材から樹液を吸い出し、体内で工業用の樹脂を精製する。コミュニンではこうした、都市とプロダクトの共生による生態系が築かれつつあった。

タケルのいる老人ホームはコミュニンの中心から少し離れていた。見晴らしのいい窓から遠くのコミュニンがぼんやりと見える。

「今日も悪いな」

タケルはイリヤをあやしながらセトに話しかける。

タケルは今年で80歳になるが、もともとは30歳まで生きられないと言われていた。先天性の遺伝子疾患によるものだったが、当時実験的に始まっていたゲノム医療によって段階的に症状は緩和され、この年齢まで生きることができた。もちろん、それはタケルにとって喜ぶべきこと

だった。しかし年を経るごとに、死ぬはずだった自分が生き延びたこと、そして本来いるはずのない息子や孫への恐怖が頭をもたげてきていた。タケルは病とともに成長したと言っている。10歳を過ぎるころにベッドから起き上がるのが困難になり、10代の後半には人工呼吸器が手放せなくなった。タケルは力の入らない身体を抱えながら絶望を必死に飲み込み、自らの運命を受け入れようとした。その時のことは今や、並行世界の出来事のように自分から切り離されてしまっている。それが時折たまらなく不気味に感じられるのだ。タケルは「自分はおそらく、病をアイデンティティの一部として自我を形成してきてしまったのだ」と思っている。だから、病を失った後の自分は一体どこからやってきたのか、それを考える度に世界の底が抜けるような薄ら寒さを覚えるのだ。そしてそれは、息子や孫という「自分の面影を帯びた別人」の姿を見るごとに、とりわけ鮮烈に心に浮かび上がってくるのだった。

そのためか、タケルはセトに先天的なゲノムへの介入を一切認めなかった。その判断が正しいのか、タケルは今でも悩んでいるように見えた。法的な義務でないとはいえ、当時でも新生児への任意編集の適用率は8割を超えており、そんな中においてタケルの方針は常識を大きく外れていると言ってしまう。事実、タケルはセトのことで息子と言い争い、今ではほとんど絶縁状態になっている。

しかしセト自身は特に困ったことはないし、強い劣等感を覚えたこともない。ゆえに、タケルに対する遺恨もない。身寄りのないタケルを月に一度見舞うのがセトとイリヤの習慣であり、その時間はセトにとって、少なからず大切なものであった。今や、個体として自己を実現することにこだわる人は少ない。セトやイリヤたちは生まれながらに遺伝子編集に触れ、生物と製品の、自然と人工の、運命とデザインの間で育ってきた。それゆえに種や個体といった境界の曖昧さを知っている。人間は自分たちの遺伝子を書き換えられるようになった——それは、さまざまな細菌が互いに遺伝子を交換し合い、少しずつ変異しながら生きていることと近いように、セトは思う。だから自分のできない何かを他の誰かができるということは、喜ぶべきことでしかない。

しかしそこに言いようのない不安があることも事実だった。全てが多様性の光の中で宙吊りにされている感覚。それを恍惚と取るか恐怖と取るかは、結局のところ個人の問題なのだとセトは思う。

「来月、イリヤの七夕祭だから。じいちゃんも来たら？」

セトはタケルにそう声をかける。七夕祭は、セトやイリヤの世代にとって特別な意味を持った日だ。遺伝子編集の選択のために子どもたちは自分の将来を高い解像度で考える必要がある。それには本人だけではなく、コミュニケーション全体の協力が必要だろう、というのが七夕祭の考え方で、その日コミュニケーションは一時的に未来のシミュレーション場となる。子どもたちはめいめいに自分の将来の夢を演じ、コミュニケーションの人々もそれに応じる。巨大な職業体験場あるいは市街劇のようなものだ。それぞれの職業の制服に身を包んだ子どもたちが街じゅうにあふれ、大人たちとともにコミュニケーションの日常の一部をつくり出そうとする姿を、セトは思い出している。

「ああ。考えておくよ」

タケルはそう言って自室へと戻っていった。タケルを追いかけようとルミナが飛び出し、セトはあわててそれを捕まえる。

七夕祭の日、コミュニケーションはどこも浮き足立っている。ランチを売る声、交通指導をする声、工事を進める声。街のあちらこちらから、子どもたちの声が炭酸のように湧いては消える。アーバン・コンダクター志望の少年は、コミュニケーションの拡張計画を立てるために、まだ成長しきっていない道路の縁をおっかなびっくり視察している。その手前では、逃げ出した鳥型のバイオプロダク

トを追って、警察志望の少女が走りながらドローンを操縦している。手元のデバイスには、5人組の子どもがまだおぼつかないダンスを踊るライブ広告が流れてくる。街じゅうが、キラキラと温かみを帯びた未来の時間によって満たされていく。そんな中で、セトだけが冷え切っている。

昨日、ルミナが死んだ。古くなった筐体からの漏電だった。ひび割れたプラスチックと冷えた毛皮が、永遠に思えたルミナの工業的な生命を否定し、あいまいになっていたプロダクトと生物の境界線を引き直しているように思えた。セトは物心つく前からルミナとともに育ってきた。セトにとってルミナは家族の一員、あるいは自分の身体の一部とさえ思えるものであった。自分はルミナを修理して再起動すべきなのか。そうしたことを考えるたびに、コミュニケーションを包む未来への讃歌が、どこか遠く感じられる。セトは、タケルが感じていた恐怖を、少しだけ理解できたような気がしていた。

「こっち向いてよ、セト」

ブリーダーの制服に身を包んだイリヤがそう声をかける。後ろには車椅子に乗るタケルの姿も見えた。

「ルミナ。こっちにおいで」

イリヤはセトの手からルミナを抱き上げた。ブリーダーは都市に住まうプロダクトたちの維持管理を行い、インフラに不調が生じればメンテナンスにおもむく。耐用年数を迎えたプロダクトがあれば回収し、適切に処分を行う。バイオプロダクトたちの一生を看取することはブリーダーの——生産者たちの責務なのだ。ルミナのような人間に極めて近いパーソナルバイオプロダクトの場合、それはすなわち「いかに弔うか」を意味していた。

イリヤは丹念に破損部のかたちを整えていく。エンバーミングのようなものらしかった。少しの時間が経ち、かつての面影を取り戻したルミナが現れた。セトはあらためて、その姿を眺める。大昔には、こんな携帯ゲーム機でデジタルペットを飼うことが流行っていたのだという。電子の粒に、樹脂の欠片に、タンパク質の塊に、生命はうつろって、人々はそれを捕まえることができない。

種や個体、自然というくびきから自由になった生命を、人々はまだ扱いきれていない。それでも確かに一時、自分と相手がそこにいたと実感することはできる。セトは、この街の賑わいを——うつろい、絡まり合い、入り組んでいく生命の網の目を、もうしばらくの間ルミナに見せてあげたいと、そう思った。

「俺が死んだ時も、こんなふうに綺麗にしてほしいもんだな」

タケルがふと、そう呟く。

「じいちゃんはプロダクトじゃないから、ダメだよ」

イリヤがあまりに真剣そうに答えるので、2人は思わず吹き出してしまう。

セトがルミナを掌に乗せる。その後ろにイリヤとタケルが続く。3人だけの短い葬列が、七夕祭の喧騒の中をすり抜けるようにしずしずと進んでいく。